



子供の質問力を高めるための指導の要件

学校は失敗するところ！ 教室は間違えるところ！ 授業は子供が主人公！
子供の成長を教育活動のど真ん中におく！ One for all. All for one. チーム拝二小

I 質問できない/ (援助要請) しないのはなぜか？

- ① 質問した時の相手（教師）の否定的な反応や態度の影響を受け、固まってしまい援助要請できない。
- ② 分からないことを質問する、できないことを教えてほしいと頼むことは、自分の能力が低い状態を他者に表明することである、と捉えてしまい援助要請できない。
- ③ 「どんなふうに質問していいのかわからない。」、「教えてもらいたいけど、全部分からなくなってしまって聞けない。」など、自分の理解状態を把握し、学習のつまずきを明確にできない。（「メタ認知」がうまく機能できない。）

II 依存的な質問になるのはなぜか？

- ① 学習においてプロセスではなく結果の正誤を重視する児童ほど、「ヒント」や「解き方」よりも答えを求めようとする傾向がある。
- ② メタ認知スキルが十分に身に付いていないため、問題を他者に丸投げしてしまう傾向がある。

	自律的質問者	依存的質問者
問題解決の主体	児童	教師
必要性	十分	不十分
質問内容	ヒント・解き方	答え

III 自律的に質問できる児童を育てる

※熟達目標：自らの資質・能力をできる限りに伸ばそうとする目標設定

- ① 「熟達目標志向の動機づけを促す」：学習場面で、児童一人一人がどのように伸びたのかが、より重要であり、そうした熟達目標志向の動機づけを促す。また、「学習のつまずきは自分の弱点を教えてくれる貴重な情報であり、質問するなど適切に対処していくことが自己を成長させる。」といった、児童に「学習のつまずきを活用する学習観」の形成を図っていくことが大切である。
- ② 児童が主体的に学習のつまずきを解消していくためには、学習のつまずきをスモールステップで系統的に示してあげることが大切である。
- ③ 児童の質問に対し、学習のつまずきの原因やこれからの対策を丁寧かつ熱心に教えることが自分の役割と考える教師は、少なくない。

しかし、そのことが児童の主体性、思考活動を奪い、児童の依存的態度の形成を促す危険性もはらんでいる。

	教師主導型指導	相互対話型指導
特徴	学習のつまずきの解消を教師が主導して考え、その結果を伝達する。	学習者自身が、学習のつまずきを解決できるよう、対話を通じて思考できるよう誘発する。
指導方法例	○間違っただ原因を教師が教える。 ○重要なポイントを教師が教える。 ○どうすれば間違わないか教える。	○どのように考えたか説明させる。 ○間違っただ原因を考えさせる。 ○どうすれば間違わないか尋ねる。